

司会者よりの提起

村越末男

差別と表現を考えるシンポジウムに先立ち、若干の提起をしたいと思います。

差別というものは、歴史的、社会的な構造物でございます。同時に、人間の社会意識として、一般的に幼ない頃から、具体的な社会を通じた教育により教えこまれたものでもございます。同時にそれは、差別が、言語として、感情として、表現をされる内容をもつ意識の問題であることもまぢがいございません。

1 司会者よりの提起

今日、部落に対する差別用語としてよく使われる「新平民」であるとか、「特殊部落民」であるとか、はては「鉛筆のシン」「ルート16」「レンガ一束」等々、数限りなく差別的表現は存在します。一つの差別表現、言語というものが、社会的に大きな緊張感をもって語られていることも

事実です。なかなか、差別という問題について、フランクに討議する作風は、まだ日本にはございません。特に日本においては、緊張感をともなって表現されているところがございます。

ところが言語というものは、ある面では、歴史的社会的影響のもとに形成されたものでございまして、差別的歴史的、社会的構造物の中では、無意識の中に差別的表現というものが、あらわれてくるものもございます。もちろん、目的意識をもって差別を表現するものもあるわけですが、一般的にいえば、部落解放運動の前進とともに、最近ではアンタツチャブル、不可触とするところの、消極的ではあるが、非常に根深い不作為な差別的表現が多くみられます。また、東大の有賀教授の差別発言事件や、曹洞宗の

町田宗務総長の発言のように、「差別はもはや、存在しない」という全く逆な表現方法をもって、差別を表現することもあるわけがございます。

そういうものは、アンタツチャブルからインビジブル、見えない状態として、存在しないという「錯覚」にまでいきつき、「差別は、もはや存在しない」という積極的な規定にまでなってくるわけです。

ところで、日本の歴史的な伝統である落書き、これは、非常に多数の人々の支持をえているという伝統があるわけですが、これが、かつては陰湿に便所のカベ等に書かれていたのが、最近では、大学構内の目のつくところに、体育館や教室や公共物に人目につくように大きく描かれるに至っています。そしてそれが、集団的に書いたと思われる形跡がみられる。小さく陰湿であったものが、だんだんと質量ともに大きくなり悪質化している。例えば、「大阪市大から部落民をおい出せ」「大阪市から部落民をおい出せ」「日本から部落民をおい出せ」というようにエスカレートしています。「部落民は殺すためのターゲットである」「自ら手を下すのではなく、落書きなどによって自殺に追い込め」というものから最後には、「部落民をガス室におくれ」「部落民をみな殺しにせよ」という差別落書きが、地域の解放会館や公共の場に大きく表現されるという

ネオナチズムの動きすら感じさせる段階にいたっているわけがございます。

ところが、日本のマスコミは、それ自体、差別的な歴史を持ち、ある面では、今でも差別的であるといえます。

日本の出版界も、だいたいよく似た状態にあり、部落問題をアンタツチャブルなものにしていたのでございます。部落解放同盟が、差別事件を糾弾すると、それを理由にして、またまた、アンタツチャブルの傾向がふえていく面もみられます。しかし、同時にそのような体質を脱却し、新しい時代の要請に対応するため、部落問題を積極的にとり上げていこうとする熱心な動きもあらわれてまいりました。

こうした部落問題を積極的に追求していこうというマスコミ、出版界、学者、研究者が増加してきたことは、今日のこの場がそれを証明しているわけでございます。

本日は、多面的な場からこの「差別と表現」につきましまして、自由に御発言をいただきたいと思っております。

(部落解放研究所副理事長)